

中久世遺跡・大藪遺跡

2007 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

中久世遺跡・大藪遺跡

2007 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来 1200 年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成 13 年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび宅地造成工事に伴う中久世遺跡・大藪遺跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

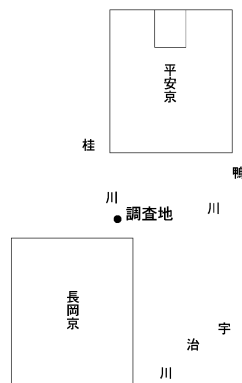
末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げる次第です。

平成 19 年 2 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 中久世遺跡・大藪遺跡
- 2 調査所在地 京都市南区久世大藪町 156 - 2 他
- 3 委 託 者 洛西建設株式会社 代表取締役 清水 章
- 4 調査期間 2006年11月16日～2006年12月8日
- 5 調査面積 390 m²
- 6 調査担当者 平田 泰・能芝 勉
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「川島」「吉祥院」「寺戸」「久世」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺構番号 遺構ごとに付し、遺構の種類を前に付けた。
- 13 遺物番号 通し番号を付し、写真番号と統一した。
- 14 掲載写真 村井伸也 幸明綾子
- 15 基準点測量 宮原健吾
- 16 本書作成 平田 泰・能芝 勉
- 17 編集・調整 中村 敦・児玉光世・近藤章子・山口 眞



(調査地点図)

0 2 4km

目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査の経緯	1
(2) 位置と環境	3
(3) 既往の調査	5
2. 遺 構	10
(1) 基本層序	10
(2) 検出遺構	10
3. 遺 物	15
(1) 遺物の概要	15
(2) 出土遺物	15
4. ま と め	19

図 版 目 次

図版1	遺構	1	調査区全景（西から）
		2	周溝墓1（西から）
図版2	遺構	1	周溝墓1 遺物出土状況（西から）
		2	周溝墓1 遺物出土状況（北から）
		3	土壇1 遺物出土状況（北から）
図版3	遺物		出土遺物

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：5,000）	1
図2	調査区配置図（1：1,000）	2
図3	周辺遺跡位置図	4
図4	既往調査位置図（1：5,000）	6
図5	調査前全景（西から）	9
図6	調査風景（西から）	9
図7	調査区断面柱状図（1：40）	10
図8	調査区遺構平面図（1：200）	11
図9	周溝墓1実測図（1：100）	12
図10	周溝墓1断面図（1：20）	13
図11	土器出土状況実測図（1：20）	14
図12	出土土器実測図1（1：4）	15
図13	出土土器実測図2（1：4）	17

表 目 次

表1	遺構概要表	14
表2	遺物概要表	18
表3	掲載土器一覧表	18

中久世遺跡・大藪遺跡

1. 調査経過

(1) 調査の経過

京都市南区久世大藪町 156-2 他の約 9,618 m²の敷地で、宅地造成工事が実施されることになった。当該地区は大藪遺跡と中久世遺跡の比定地内に含まれており、平成 18 年 8 月 10 日に京都市文化財保護課の試掘調査が実施された。調査の結果、対象地の南西地区で、溝、柱穴、土壌が確認されたため、南西地区を中心に発掘調査を実施する指導が行われ、発掘調査の実施を財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託される運びとなった。委託を受けた研究所は京都市文化財保護課の指導により南西地区の東西 30 m、南北 13 m の約 390 m²の調査区を設定して発掘調査を実施した。調査の結果、弥生時代の方形周溝墓、平安時代の土壌、室町時代の建物などを検出した。調査期間は 2006 年 11 月 16 日から同年 12 月 8 日であった。

調査は、11 月 16 日に現代耕土層を重機によって除去、11 月 17 日から本格的な調査を開始し、11 月 24 日までに方形周溝墓、土壌、建物、畝溝などを検出した。11 月 30 日には全景写真を撮影、12 月 5 日までに遺物の取り上げ、図面類の作成を行った。この後、断割り調査などの補足調査を

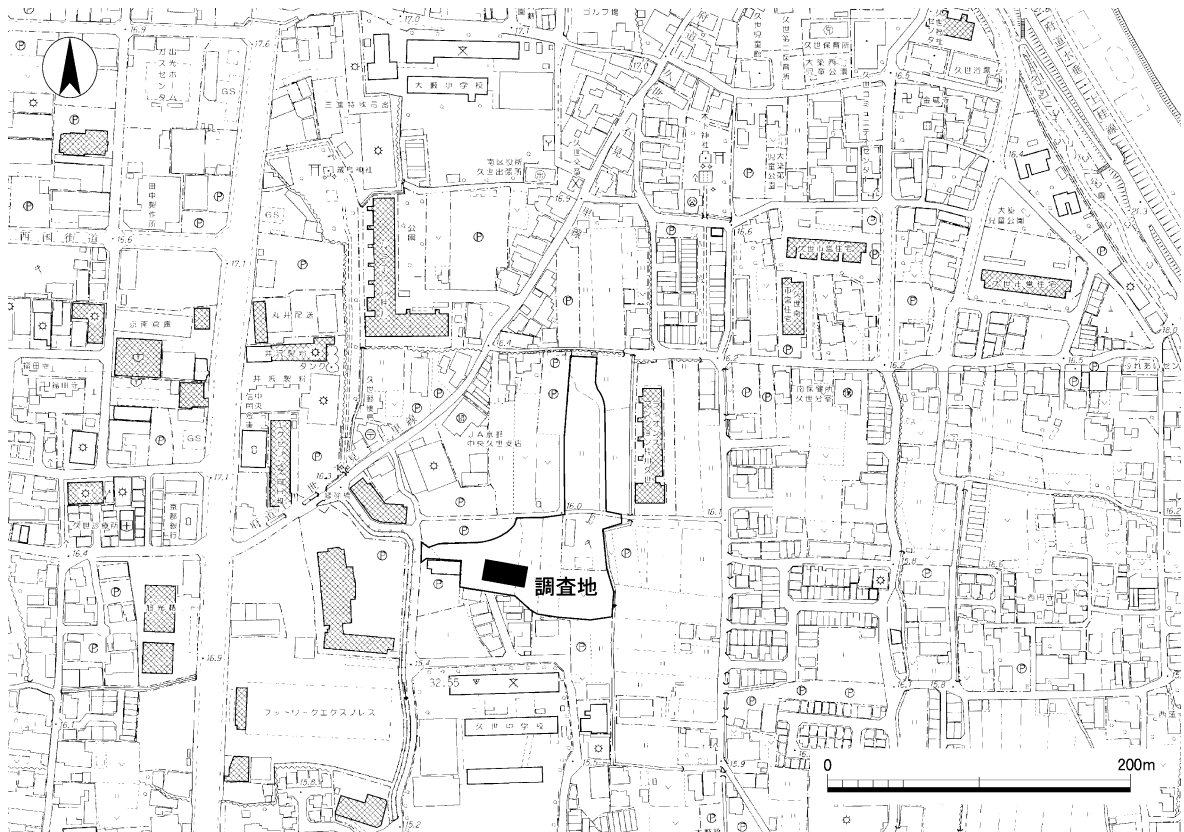


図1 調査位置図 (1 : 5,000)

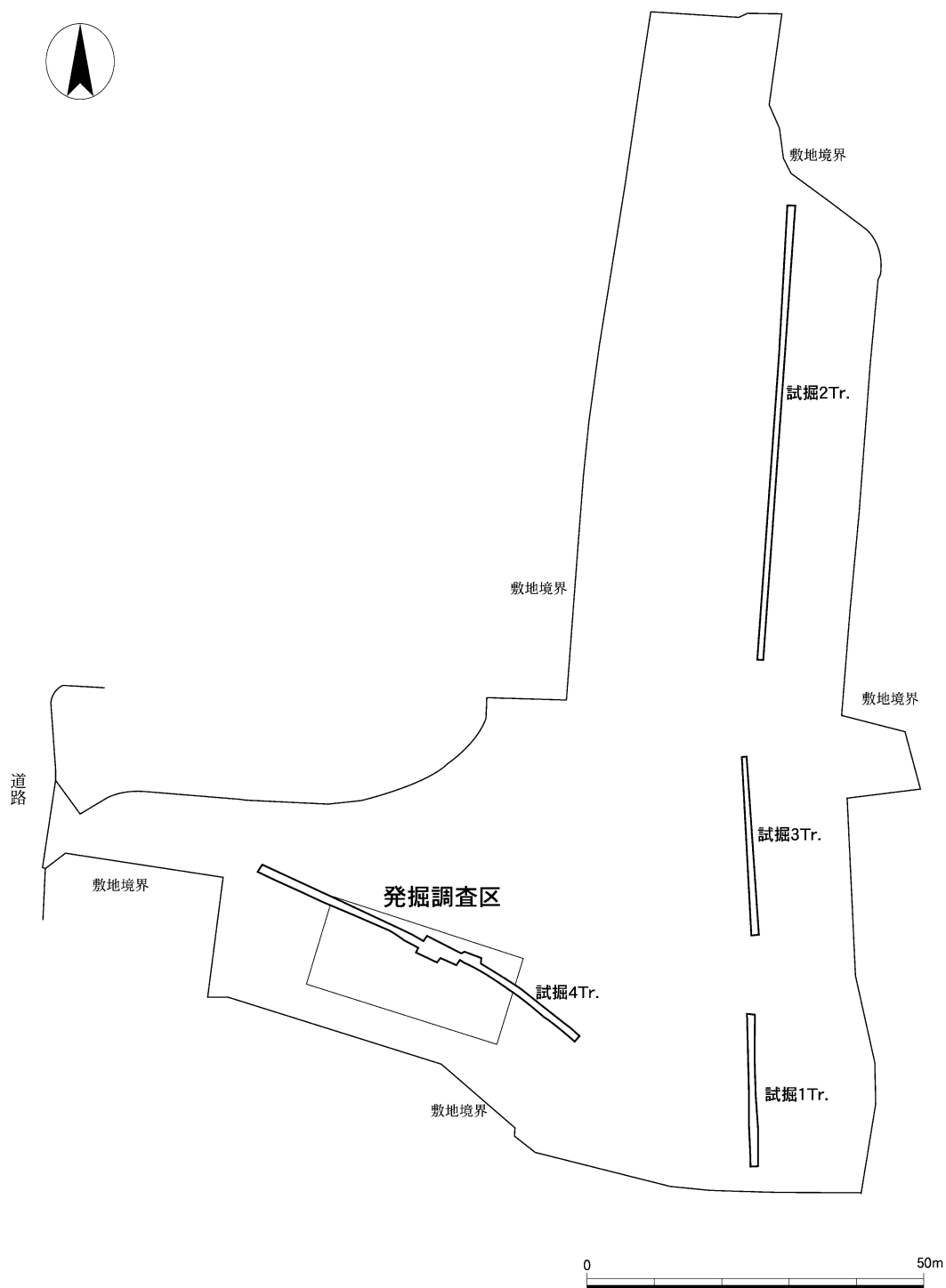


図2 調査区配置図（1：1,000）

行い、調査器材の撤去などの撤収作業に入り、12月8日にすべての作業を終了した。

現場での作業終了後、直ちに図面整理、遺物洗浄、遺物実測などの整理作業に入り、終了報告書、調査報告書の作成を開始した。すべての作成作業は本報告書の刊行をもって終了した。

(2) 位置と環境

調査地は京都市南区久世大藪町にある。久世大藪町は南区の南西部にあり、桂川を渡った右岸に位置する。一帯はやや高燥な平坦地で、標高は15 m前後、北西から南東方向にわずかに傾斜する。調査地のベースは黄褐色の均一な泥土層で、同一とみられる堆積層が約1 mの厚さで堆積している。この土層は桂川左岸の旧平安京右京域にみられる黄褐色泥土層に類似する。30万年前の最終間氷期が終了し、寒冷化による海退が始まり、京都盆地は内湾から内湖化した。12万年前の温暖化では枚方付近までの海進に終わり、京都盆地内に達してはいない。調査地に堆積した黄褐色の泥土層は、内湖化していた盆地底に長期にわたって堆積した淡水性の土層で、最終氷期を経て縄文海進の始まる時期には、陸化は徐々に進行し、桂川による扇状地性の沖積層はこの付近には達していない。このために、この泥土層は縄文時代を通じて浅湖状態で経過、縄文時代後期から晩期に至って湿地状態に転化、弥生時代の生活面になったものとみられよう。

桂川右岸での調査地近辺では、旧石器時代の遺跡が向日丘陵や乙訓丘陵の縁辺部で見出される。大枝遺跡、殿町遺跡、岸ノ下遺跡、北山遺跡、今里遺跡、下海印寺遺跡がこれにあたり、ナイフ形石器、彫器、片刃磨製石斧、細石刃、尖頭器の出土がみられる。縄文時代に入ると、有舌尖頭器や石鏃、土器が出土する。遺跡では大枝遺跡、南山遺跡、森本遺跡、東土川西遺跡、石田遺跡、鶏冠井遺跡、井ノ内遺跡、今里遺跡、馬場遺跡、神足遺跡、下海印寺遺跡、開田遺跡、上里遺跡などがある。大枝遺跡は縄文時代前期に属し、南山遺跡が中期、鶏冠井遺跡が中期・晩期で、他は後期・晩期の遺跡である。

京都盆地で最初に稲作が開始された遺跡には雲宮遺跡や下鳥羽遺跡などがあり、弥生時代前期前半頃である。淀川を遡り根付いた稲作技術は、縄文時代後期から晩期の集落遺跡が普及の母体になることで、小畑川流域の神足遺跡、今里遺跡、羽束師川流域の鶏冠井清水町遺跡、鶏冠井遺跡、森本遺跡、中久世遺跡を成立させ、弥生時代中期から後期にはそれぞれが母村となり、枝村や子村を形成して、周辺に拡大発展している。神足遺跡は馬場遺跡、南栗ヶ塚遺跡、小泉川沿いの畷遺跡や下海印寺遺跡を、今里遺跡は井ノ内遺跡、上里遺跡、長法寺遺跡、谷山遺跡、鶏冠井遺跡は鴨田遺跡、東土川西遺跡、森本遺跡は石田遺跡、殿長遺跡、中久世遺跡は上久世遺跡、東土川遺跡、下津林遺跡を成立させ、調査地の大藪遺跡も中久世遺跡の枝村と考えることができるかも知れない。それぞれに盛衰はあるが、拠点集落の多くは古墳時代にも引き継がれ、中久世遺跡も例外ではない。

やがて弥生時代が終焉を迎えるとともに、西方に遠望できる向日丘陵には、前方後方墳の元稲荷古墳を始めとして、前方後円墳の寺戸大塚古墳、五塚古墳、妙見山古墳などが相次いで築かれている。乙訓丘陵やその山麓には、やや遅れて前方後方墳の長法寺南原古墳、今里車塚古墳、小畑川下流西岸には恵解山古墳が築かれている。乙訓地域は、その南部側が淀川に開かれ、大阪湾から瀬戸内の海上ルートに直結されている。北部は小畑川の上流の大枝から老ノ坂を越えて、丹波・丹後に通ずる山陰道の起点に位置する。これらの継起的に築造された古墳が、ヤマト王権との密接な関わりを基盤に、豊かな生産力を有し、多方面に通ずる交通の要衝に位置する乙訓地域を統



- | | | | |
|------------|-----------|------------|------------|
| 1 大枝遺跡 | 15 石田遺跡 | 29 長法寺遺跡 | 43 妙見山古墳 |
| 2 大原野石見町遺跡 | 16 北山遺跡 | 30 下海印寺遺跡 | 44 五塚原古墳 |
| 3 下津林遺跡 | 17 修理式遺跡 | 31 伊賀寺遺跡 | 45 北山古墳 |
| 4 上久世遺跡 | 18 内裏下層遺跡 | 32 友岡遺跡 | 46 元稲荷古墳 |
| 5 中久世遺跡 | 19 殿長遺跡 | 33 南栗ヶ塚遺跡 | 47 稲荷塚古墳 |
| 6 大藪遺跡 | 20 東土川西遺跡 | 34 裕遺跡 | 48 下東ノ口古墳 |
| 7 戊亥遺跡 | 21 鴨田遺跡 | 35 松田遺跡 | 49 親王塚古墳 |
| 8 東土川遺跡 | 22 上里遺跡 | 36 宮脇遺跡 | 50 今里庄ノ瀨古墳 |
| 9 鶏冠井遺跡 | 23 井ノ内遺跡 | 37 下植野南遺跡 | 51 今里車塚古墳 |
| 10 鶏冠井清水遺跡 | 24 今里遺跡 | 38 天皇の杜古墳 | 52 舞塚1号墳 |
| 11 雲ノ宮遺跡 | 25 陶器山遺跡 | 39 百々池古墳 | 53 今里大塚古墳 |
| 12 水垂遺跡 | 26 神足遺跡 | 40 一本松塚古墳 | 54 長法寺南原古墳 |
| 13 中海道遺跡 | 27 開田遺跡 | 41 物集女車塚古墳 | 55 恵解山古墳 |
| 14 森本遺跡 | 28 谷山遺跡 | 42 寺戸大塚古墳 | 56 鳥居前古墳 |

図3 周辺遺跡位置図

率した首長とその一族の系譜墓であることは疑えない。

乙訓地域は奈良時代末に至って、長岡京が建設される。中久世遺跡や大藪遺跡のある久世は京の北郊となり京域内に取り込まれてはいない。平安時代には桂川以東が平安京域となる。京を発して桂川を渡る重要な渡河地点となり、西国方面に向かう交通の要衝地となっている。

参考文献

- 京都市『京都の歴史1 平安の新京』(株)学芸書林 1970年
京都市『洛西ニュータウン地域の歴史地理学的調査』1972年
京都市『史料京都の歴史 第13巻 南区』(株)平凡社 1980年
向日市『向日市史 上巻』1983年
横山卓雄『平安遷都と鴨川つけかえ』法政出版(株) 1988年
京都府教育委員会『京都府遺跡地図 第4分冊』1989年
長岡京市役所『長岡京市史』1996年
京都市文化市民局『京都市遺跡地図台帳』2003年

(3) 既往の調査

大藪遺跡の最初の調査は、昭和47年(1972)に実施されている。南区久世大藪町、殿城町にまたがる組合立第三乙訓中学校建設に伴うもので、校舎建設予定地の約100㎡を対象に行われた。調査で検出された遺構は北西から南東に向かう溝状流れと杭列で、出土遺物は弥生時代中期から後期、古墳時代前期・中期、奈良時代、長岡京期、平安時代、鎌倉時代のものが出土している。弥生時代の土器は畿内Ⅳ様式に属したS字状口縁の甕が出土し、古墳時代前期は土師器の二重口縁壺と甕が出土した。古墳時代中期は須恵器杯蓋がある。奈良時代から長岡京期の遺物は土師器杯・皿・甕・鉢、須恵器蓋・杯・壺・甕、木製品槽・盤・曲物・有孔木器、祭祀遺物として塔婆形木器・土馬・ミニチュア竈・人面墨書土器・馬の歯・骨、その他の遺物として土錘・銅製丸軛・乾漆片・藁製円座・植物種子などがある。平安時代の遺物は土師器杯・皿・甕、須恵器甕、瓦がある。瓦は平瓦、軒平瓦があり、軒平瓦は均整唐草文軒平瓦で平安時代初期とみられている。鎌倉時代は瓦器椀の小片が出土した。調査者は、杭列の十数回の打ち替えと複数列の存在を観察されており、初現期を奈良時代の中頃とされている。(図4-1)

昭和55年(1980)には、乙訓中学校の東方約100mの久世大藪町213番地の水田で1,500㎡の住宅建設に伴う発掘調査が実施された。調査では杭列を伴う弥生時代中期の溝、長岡京期から平安時代前期の東西方向の溝、平安時代後期から室町時代の建物、柱穴、井戸、土壙、溝などを検出している。出土した遺物には縄文時代後期の深鉢がある。弥生時代の溝の肩になる土層中から出土したもので、体部にヘラ描き沈線と扇形文様があり、後期末の宮滝式に近いものとされる。弥生時代の遺物は弥生土器壺・甕、不明木製品、石鏃がある。弥生土器甕は口縁部と底部に粗いハケ目が認められ、畿内第Ⅱ様式に属するとみられている。長岡京期から平安時代前期の土器は土師器杯・皿・甕、須恵器蓋・杯・壺・甕・瓶子が出土した。平安時代後期から室町時代の遺物

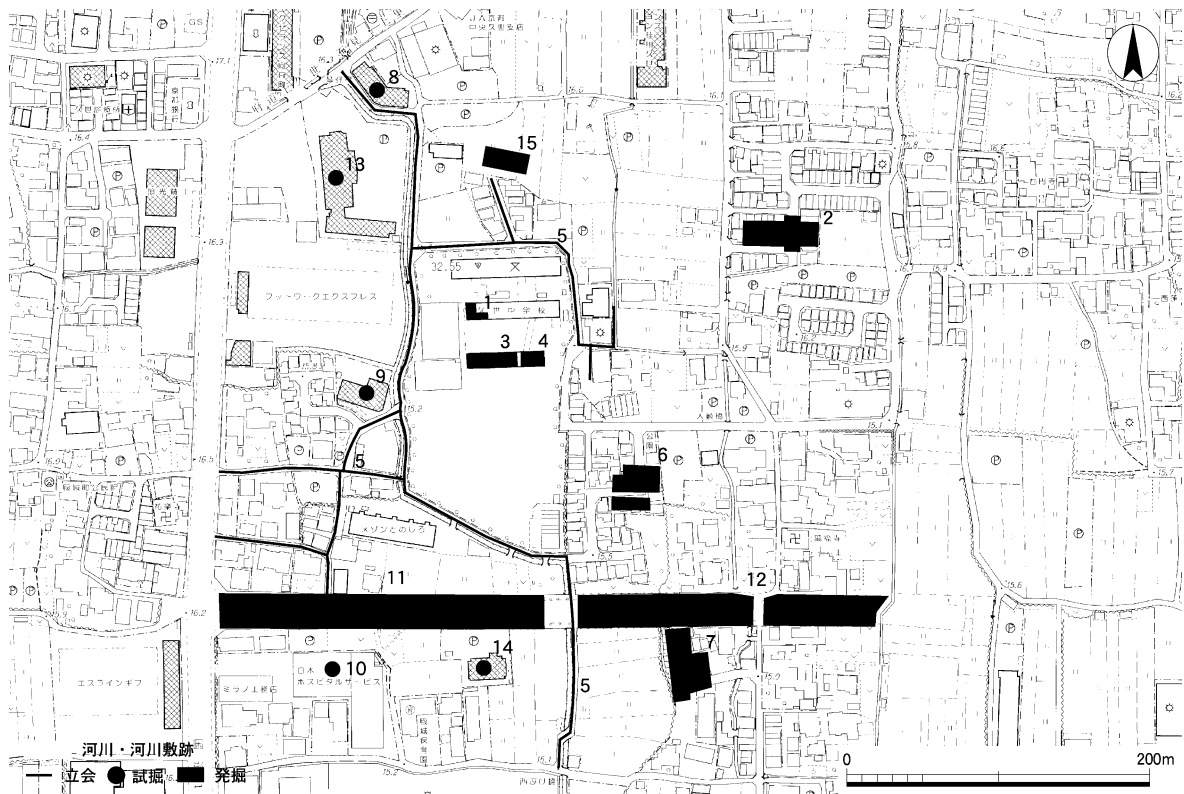


図4 既往調査位置図（1：5,000）

は土師器皿、瓦器椀・皿・釜・鍋・鉢、須恵質陶器鉢、白磁皿、青磁椀、銅製穿孔円盤、曲物などがある。弥生時代の溝は南東方向へのカーブ傾向が認められること、南北の杭列間約4mを測ることなどから用水路の他に環濠になる可能性にも留意されている。長岡京期から平安時代前期の溝は十二条笠鹿里、十一条川依里を南北に分ける条里溝とみられており、平安時代後期から室町時代の遺構は柱穴が500基以上、井戸が14基もあり、長期にわたる居住環境を形成した集落遺構とみられている。（図4-2）

昭和58年（1983）には久世殿城町481の久世中学校校舎増築工事に伴う調査が実施された。位置は中学校建設時の発掘調査地の南東にあたる、約300㎡の調査であった。検出した遺構は流路と3列の杭列であった。前面の杭列は護岸であるが、後列の一部はしがらみとしての機能を持ったものと結論付けられている。出土遺物は縄文土器、弥生土器壺・甕・器台、古墳時代の土師器椀・杯・甕、須恵器蓋・杯・高杯・壺・甕、奈良・平安時代の土師器杯・皿・人面墨書土器・甕、黒色土器椀、須恵器杯・壺・瓶子・甕、灰釉陶器椀、緑釉陶器椀、瓦片がある。土製品では土馬、ミニチュア竈・甌、木製品には人形、削り掛け、櫛、張形、弓、柄杓、曲物、紡織具、鋤柄、下駄、箸、盤、獣脚、櫃、用途不明木製品、長方形盤がある。杭列の築造時期に関しては、杭を打ち込んだ土層が古墳時代であること、杭列を覆う土層が平安時代中期であること、奈良時代の遺物が杭列ないから多数出土したことなどから奈良時代に仮定されている。（図4-3）

昭和60年（1985）の調査は同じく久世中学校の校舎増築工事に伴うもので、昭和58年（1983）調査の東隣約150㎡の調査であった。検出した遺構は流路と杭列で、杭列の構造を明確にしている。杭は数列にわたって垂直に打ち込み、これに斜め方向からも打ち込み、その間に丸太を横に渡し

て組み合わせて築造する。出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器、緑釉陶器、木製品人形、斎串、曲物底板、加工木片、中世の遺物包含層から土師器、陶器、瓦器が出土している。(図4-4)

昭和62年(1987)に久世大藪町234番地の約450㎡の畑地で住宅建設に伴う発掘調査が実施された。検出した遺構は後世の遺構に切られた弥生時代後期の竪穴住居跡、南北方向の流路と杭列、鎌倉時代の壕跡を検出している。弥生時代の竪穴住居は辺を北西に向けた方形のもので、西半を鎌倉時代の壕で削平されている。3箇所の柱穴と壁溝、排水溝が遺存しており、規模を復元すると一辺10mの方形竪穴住居跡となる。流路はほぼ南北方向で、杭列による護岸施設がみられる。鎌倉時代の壕跡は南北方向で、幅約6m、深さは0.8mを測る。東方の集落を西側の湿地、耕作地と区画したものとみられている。出土遺物は竪穴住居から弥生土器高杯・壺・甕・鉢・器台、石鎌が出土し、出土土器は時期的に畿内第Ⅴ様式に収まると判断されている。流路からは弥生時代、古墳時代、奈良時代、長岡京期から平安時代の遺物が出土した。弥生土器高杯・壺、古墳時代の土師器杯・甕、須恵器蓋・杯・壺、奈良時代の土師器杯・甕、須恵器杯・甕、長岡京期から平安時代の土師器皿・杯・高杯・壺、須恵器皿・杯蓋・壺がみられる。鎌倉時代の壕からは土師器、瓦器、漆器椀・皿、木製品折敷が出土している。(図4-5)

昭和62年(1987)の公共下水道建設工事に伴う立会調査は久世殿城町、大藪町一帯で実施された。確認された遺構は流路、溝、土壌などがある。流路は弥生時代から連続し、奈良時代に杭列による護岸を施したもので、おおむね平安時代後期には埋没する。溝は弥生時代後期のもの、条里の溝とみられるもの、鎌倉時代の堀になる可能性を持つものが確認されている。土壌は久世中学校校庭の西側で確認したもので、弥生時代中期に属したものである。出土した遺物は、流路から弥生時代後期の土器壺・甕・高杯、奈良時代以降の土師器皿・杯、須恵器蓋・杯、製塩土器、緑釉陶器皿がある。(図4-6)

昭和63年(1988)には久世大藪町291番地で宅地造成に伴う調査が実施された。調査区は対象地南部の約170㎡を設定して実施された。遺構は鎌倉時代から江戸時代前期の建物、柱穴、土壌、井戸、溝などを、江戸時代中期の遺構は建物の礎石、根石、土壌、溝などが検出されている。出土遺物は井戸、土壌などから出土したもので、鎌倉時代後期から室町時代中期の土師器皿、瓦器椀・鍋・釜、陶器甕・鉢がある。室町時代後期から江戸時代前期には東播系陶器に変わって備前、信楽系陶器の増加が確認された。他に金属製品包丁・杯、銭貨、漆器椀、木製品櫛・籠が出土した。調査の主目的であった弥生時代、古墳時代の集落跡の確認はできなかったが、中世の集落跡を確認したこと、江戸時代に至る長期にわたる集落跡であること、遺構の方位が揃うことで計画性の存在が窺えることなどの知見が得られている。(図4-7)

平成4年(1992)には、久世中学校の北西50mの久世殿城町442番地で試掘調査が実施され、地表下1.2mで弥生時代の溝が検出されている。(図4-8)

平成5年(1993)の試掘調査では、久世中学校の西側、殿城町465番地で弥生時代から古墳時代の遺物包含層が確認されている。(図4-9)

平成10年(1998)には、殿城町535、539-1番地の試掘調査では調査地の南側で弥生時代の

湿地状堆積土が確認されている。(図4-10)

平成10年(1998)の街路建設工事に伴う発掘調査では、弥生時代後期の南流する河川の西岸、湾曲しながら北から南東に延びる溝、南西方向へ湾曲して延びる溝、大型の隅丸方形竪穴住居、円形の竪穴住居2戸、住居跡の東側と西側のそれぞれで方形周溝墓を検出している。大型の住居跡は、床面積が120㎡に及ぶもので、検出された主柱穴には径0.3mの柱痕が遺存していた。壁際には側柱痕跡があり、周囲に壁を有したとみられている。壁際の土壌からは住居外に延びる溝があり、溝内に木樋が検出されたことにより、溝は暗渠化されていたとみられている。環濠で囲まれた住居跡のある地区が集落で、その東西の外縁に墓域が設定されている遺構の配置が確認されている。長岡京期の遺構は南北方向の柵、掘立柱建物、井戸、南北方向の溝が検出されている。南北溝に関しては、建物、柵の位置関係から道路の側溝の可能性を指摘されている。平安時代後期には井戸、平行して南流する溝などが検出されている。室町時代の遺構は複雑に屈曲する堀が2条、この堀の間に礎石建物があり、2条の堀は外堀と内堀、建物は門と復元され、堀は補修を受けながら存続し、現代に引き継がれたとみられている。出土遺物は住居跡、周溝墓、溝などから弥生時代後期の土器壺・器台、木製品鋤、ガラス小玉が出土している。長岡京期の遺物は井戸、溝、柱穴から土師器皿・釜、須恵器壺・ミニチュア平瓶・片耳壺・四耳壺・蓋、木製品櫛、馬顎骨が出土している。室町時代の遺物は柱穴、井戸、堀、溝、土壌などから、土師器、瓦器、陶器、白磁、青磁、木製品曲物・折敷がある。江戸時代の遺物も溝、井戸、土壌から出土し、土師器、陶器、磁器、染付、瓦類、木製品下駄・杓・曲物・折敷・位牌・漆器などがある。(図4-11)

平成11年(1999)の調査は、昨年(1998)の調査に引き続く、その東側にあたる街路建設工事に伴うものであった。弥生時代の遺構は河川としがらみ、円形竪穴住居、2箇所の柱穴群がある。河川は既往の調査で確認されてきた弥生時代から平安後期にかけて存続したもので、流路の東肩としがらみが確認された。住居跡は径7m前後に復元できるもので、床面に炭化木材と焼土が認められ、焼失家屋と推測されている。2箇所の柱穴群については、上部の削平された住居跡の可能性を指摘されている。平安時代の遺構は土壌が検出されている。形状や規模から井戸とも考えられている。出土遺物は平安時代後期の土師器、瓦器、白磁がある。鎌倉時代から室町時代の遺構は掘立柱建物、柵列、井戸、溝、堀が検出されている。出土遺物は土師器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、白磁、青磁、鞆羽口、土製品、瓦類、木製品曲物・下駄・木錘・箱・桶、腰刀、刀子、銭貨、砥石、石鍋がある。桃山時代から江戸時代時代の遺構は柱穴、土壌、井戸が検出され、出土遺物は、土師器、陶器、磁器、下駄、鋤、柄杓、羽子板、石臼、五輪塔、銭貨などがある。この調査と旧年度の調査成果から、大藪遺跡の概要が復元されている。河川は最下層から縄文時代後期・晩期の土器が出土し、上層が平安時代中期の遺物が出土する。このため縄文時代後期に形成され、平安時代中期の大規模な洪水で埋没したとされている。北西の中久世遺跡方向からの小河川を合わせて南北方向に流路を変えた河川の東岸と西岸に弥生時代後期の集落が立地する。しかし双方の集落の構成や規模の明確化は今後の課題とされている。また中世の遺構群については堀で囲まれた中に建物、井戸、園池などが整然と計画的に配置され、大藪集落の原型がこの頃に確立したと評価されている。ま



図5 調査前全景（西から）



図6 調査風景（西から）

た平安時代の土壌が井戸であれば、荘園集落の形成が平安時代後期に遡る可能性も指摘されている。(図4-12)

平成13年(2001)の久世殿城町441の中久世遺跡の試掘調査では、平安時代以降の南北溝・柱穴などが検出されている。(図4-13)

平成13年(2001)の久世中学校校庭の南50m地点の久世殿城町546-1番地の試掘調査では、耕作土直下で掘立柱建物2棟が確認されている。(図4-14)

文献（番号は既往調査位置図に対応する）

- 1) 梅川光隆『大藪遺跡発掘調査報告』1972 六勝寺研究会 1973年
- 2) 平田 泰『大藪遺跡発掘調査概要』昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査センター 1981年
- 3) 堀内明博ほか「大藪遺跡」『昭和58年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1985年
- 4) 上村和直ほか「大藪遺跡」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1988年
- 5) 吉崎 伸「大藪遺跡・中久世遺跡」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1991年
- 6) 鈴木広司『大藪遺跡発掘調査概報』昭和62年度 京都市文化観光局 1988年
- 7) 吉崎 伸「大藪遺跡」『長岡京跡・大藪遺跡発掘調査概報』昭和63年度 京都市文化観光局 1989年
- 8) 『京都市内遺跡試掘調査概報』平成4年度 京都市文化観光局 1993年
- 9) 『京都市内遺跡試掘調査概報』平成5年度 京都市文化観光局 1994年
- 10) 『京都市内遺跡試掘調査概報』平成10年度 京都市文化市民局 1999年
- 11) 西大條 哲ほか「大藪遺跡」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2000年
- 12) 吉崎 伸ほか「大藪遺跡」『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 13) 『京都市内遺跡試掘調査概報』平成13年度 京都市文化市民局 2002年
- 14) 註13に同じ
- 15) 本調査報告

2. 遺 構

(1) 基本層序

調査地周辺は耕作地が広がり、調査地区も直前まで水田耕作が行われていた。水田上面の標高は 15.7 m 前後を測る。調査区全域には水田耕作土である黄灰色泥土層が厚さ約 0.2 m で堆積しており、直下に旧耕作土とみられる灰黄褐色（にぶい黄褐色）の泥土層が厚さ約 0.1 m で堆積する。これ以下は地山とみられる黄褐色泥土が約 0.2 m、褐色泥土が平均 0.5 m、褐色泥土（混褐灰色泥土）が平均 0.5 m と続き、黒色粘土（混暗灰黄色）が確認できる。この黒色粘土は下層の断割りによって検出したもので、厚さは不明である。この土層の胎土分析の結果、アカホヤ火山灰（7600 年前の降灰）を包含することが判明した。上面の標高は 14.5 m を測る。各時期のすべての遺構は旧耕作土下の黄褐色泥土上面に成立している。多数の畝溝や、建物、土壇の埋土は暗灰色系の土層であり、方形周溝墓の埋土はおおむね暗褐色系の土層が堆積する。

(2) 検出遺構

調査では、弥生時代の方形周溝墓、平安時代の土壇、室町時代以降の建物・溝を検出した。

弥生時代の方形周溝墓は 2 基を検出した。周溝墓 1 は調査区北西部で検出した。平面形が南北にやや長い長方形で、東西約 8 m、南北約 9 m を測り、南北の軸線を北北西に傾ける。周囲の溝幅は 0.7 ~ 1.0 m で、深さは 0.1 ~ 0.6 m を測る。西辺南側の部分は深さは 0.1 m と浅くなる。周溝墓への出入りに供されたものと観察できる。出土遺物は周溝の西辺南側と南辺部に集中して出土した。西辺部からの出土遺物は小破片が多く広範に散乱した状態で出土しており、墳丘あるいは

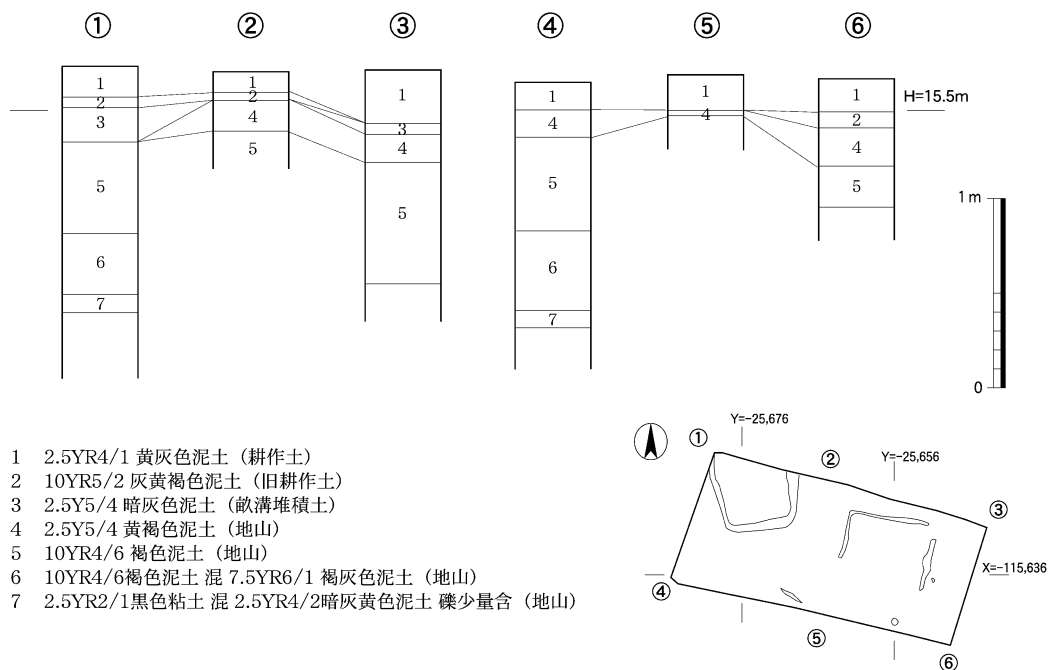


図7 調査区断面柱状図（1：40）

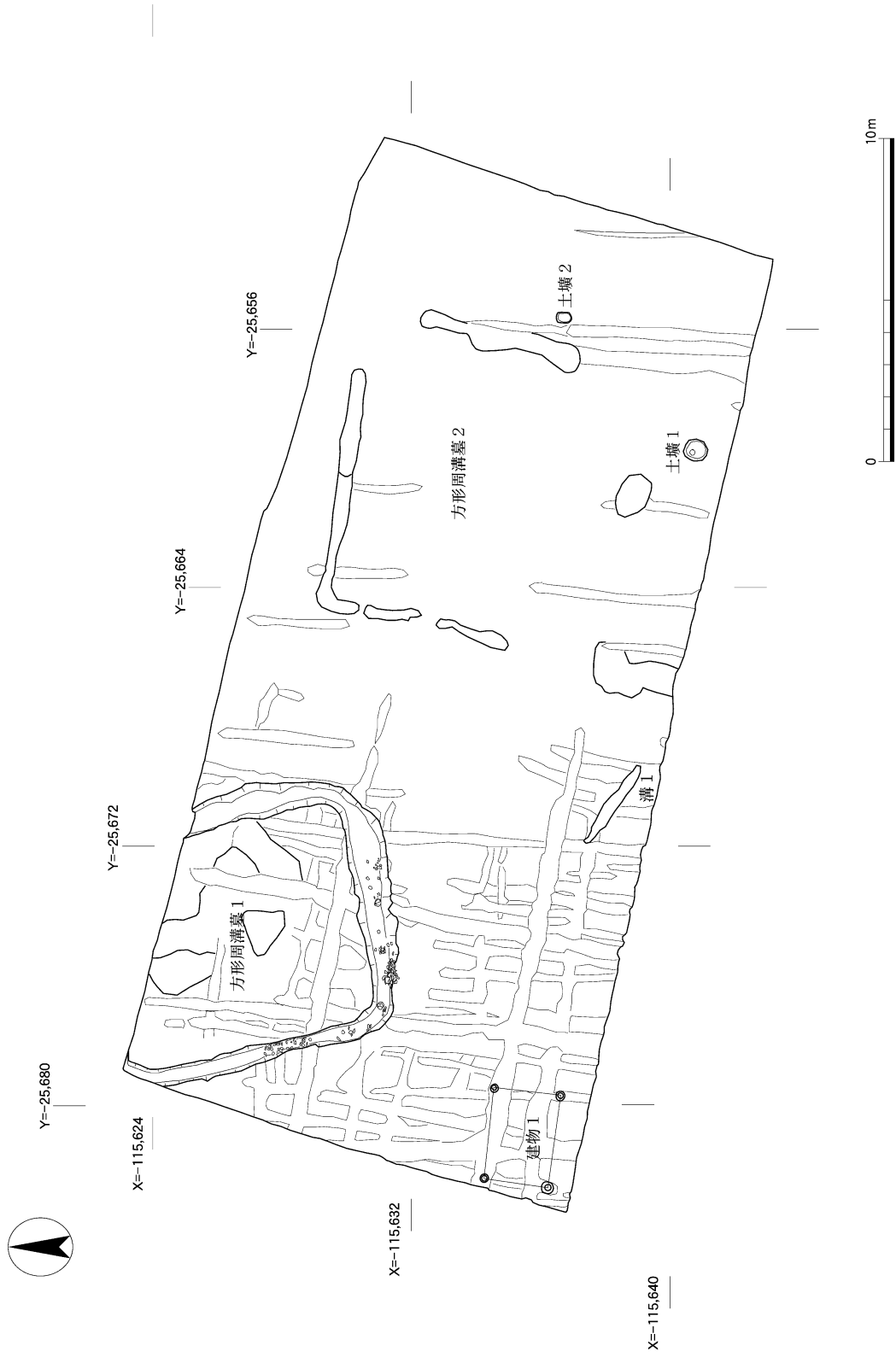


图 8 調査区遺構平面図 (1 : 200)

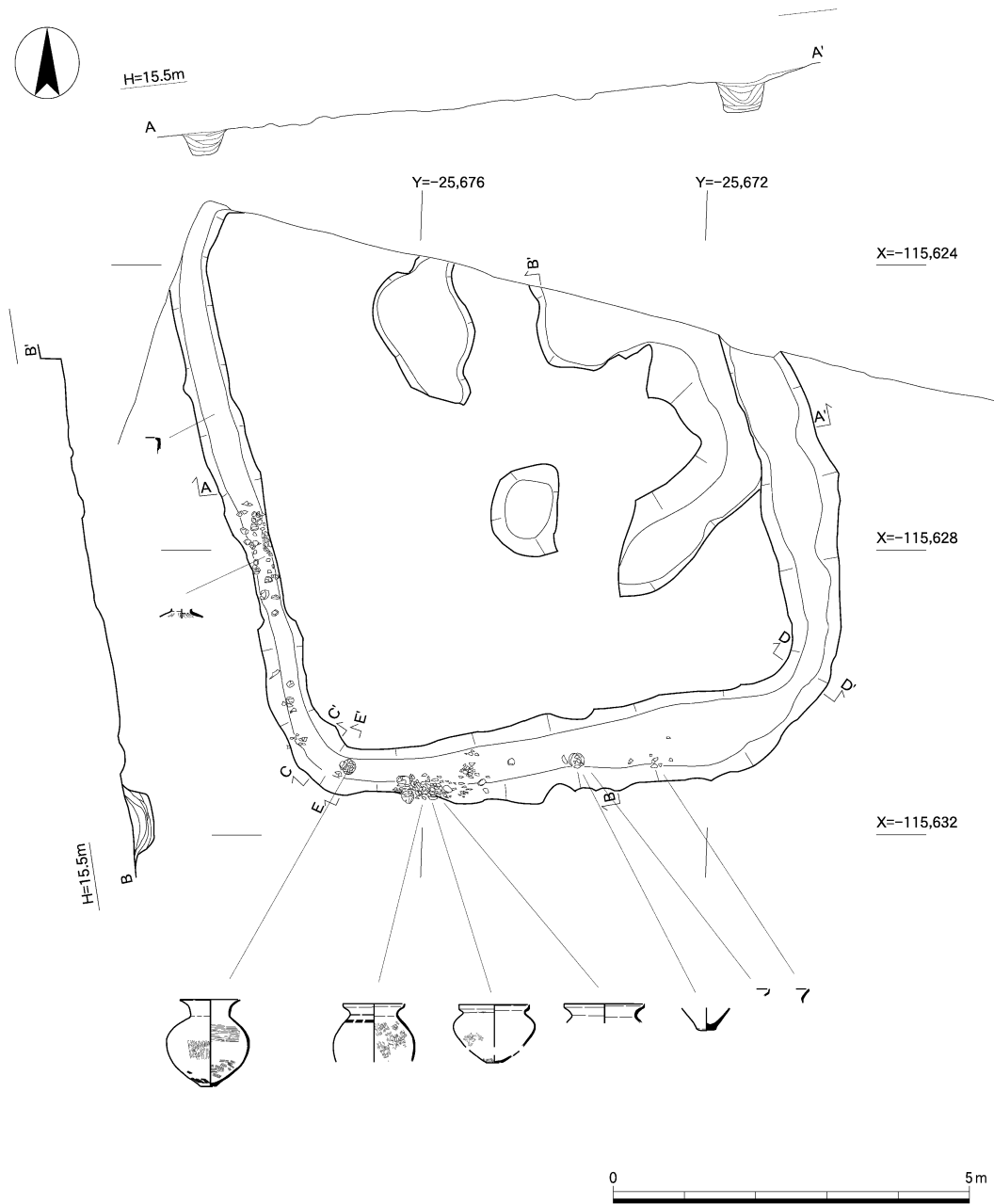


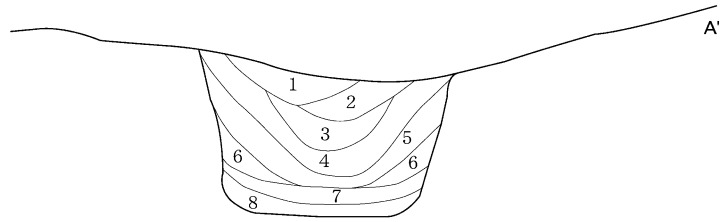
図9 周溝墓1 実測図 (1 : 100)

墳丘裾部からの転落土器類みられる。南辺部出土の土器類は個体としてまとまりが認められることや、口縁部を上面にして据え置かれた状態で出土した土器などがあり、周溝内ないしは周溝外肩部へ供献されたものとみてとれる。墓壙や墳丘土は完全に削平されて遺存しないが、周溝墓内に平面形が不定形の茶褐色土の土層が認められ、墓壙底面の堆積土の可能性もある。

周溝墓2は調査区東側で、東辺・西辺・北辺の周溝を検出したが、南辺の周溝は未検出である。周溝の深さは0.1 m前後を測る。規模を復元すれば東西9.5 m、南北10 m前後とみられる。また、調査区中央南辺で北西から南東に延びる溝が検出されている。溝方向が畝溝の方向とは異質であり、3目目の方形周溝墓の溝の可能性もある。

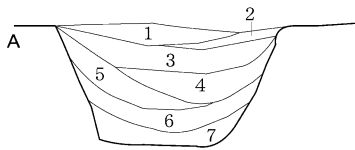
平安時代の土壙は、調査区東辺中央で2基を検出した。土壙1はほぼ円形で、径0.7 m、深さ

H=15.5m



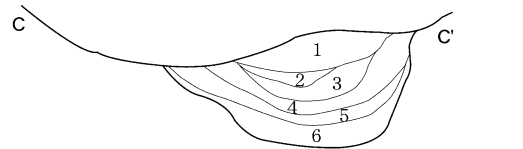
- 1 10YR3/1黒褐色泥土
- 2 10YR5/1褐灰色泥土
- 3 10YR5/1褐灰色泥土 (地山ブロック多)
- 4 10YR4/1褐灰色泥土 (地山ブロック混)
- 5 7.5YR4/1褐灰色粘土 (地山ブロック混)
- 6 10YR4/2灰黄褐色泥土
- 7 10YR2/1黒色粘土
- 8 2.5Y5/2暗灰黄色粘土

H=15.5m



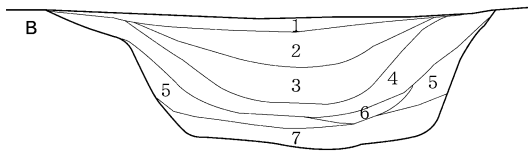
- 1 7.5YR3/3暗褐色泥土
- 2 2.5Y5/6黄褐色泥土
- 3 7.5YR3/1黒褐色泥土 (地山ブロック混)
- 4 10YR4/1褐灰色泥土 (地山ブロック混)
- 5 10YR4/1褐灰色泥土 (地山ブロック多量混)
- 6 7.5YR4/1褐灰色粘土 (地山ブロック混)
- 7 2.5YR5/2暗灰黄色粘土

H=15.5m



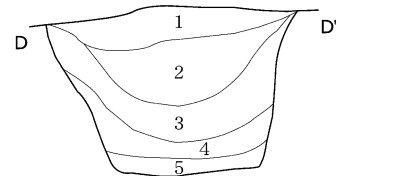
- 1 7.5YR3/3暗褐色泥土
- 2 7.5YR3/1黒褐色泥土
- 3 7.5YR4/1褐灰色泥土
- 4 10YR4/1褐灰色泥土 (地山ブロック混)
- 5 10YR3/3暗褐色泥土 (地山ブロック混)
- 6 10YR6/8明黄褐色粘土

H=15.5m



- 1 7.5YR3/3暗褐色砂泥
- 2 7.5YR3/1黒褐色泥土
- 3 7.5YR3/1黒褐色泥土 (地山ブロック混)
- 4 10YR4/1褐灰色泥土
- 5 10YR6/8明黄褐色粘土
- 6 10YR3/1黒褐色泥土
- 7 10YR5/8黄褐色泥土

H=15.5m



- 1 7.5YR3/3暗褐色砂泥
- 2 7.5YR3/1黒褐色泥土
- 3 10YR5/8黄褐色泥土 (地山ブロック混)
- 4 10YR3/3暗褐色泥土 (粘性強い)
- 5 10YR6/8明黄褐色泥土



図 10 周溝墓 1 断面図 (1 : 20)

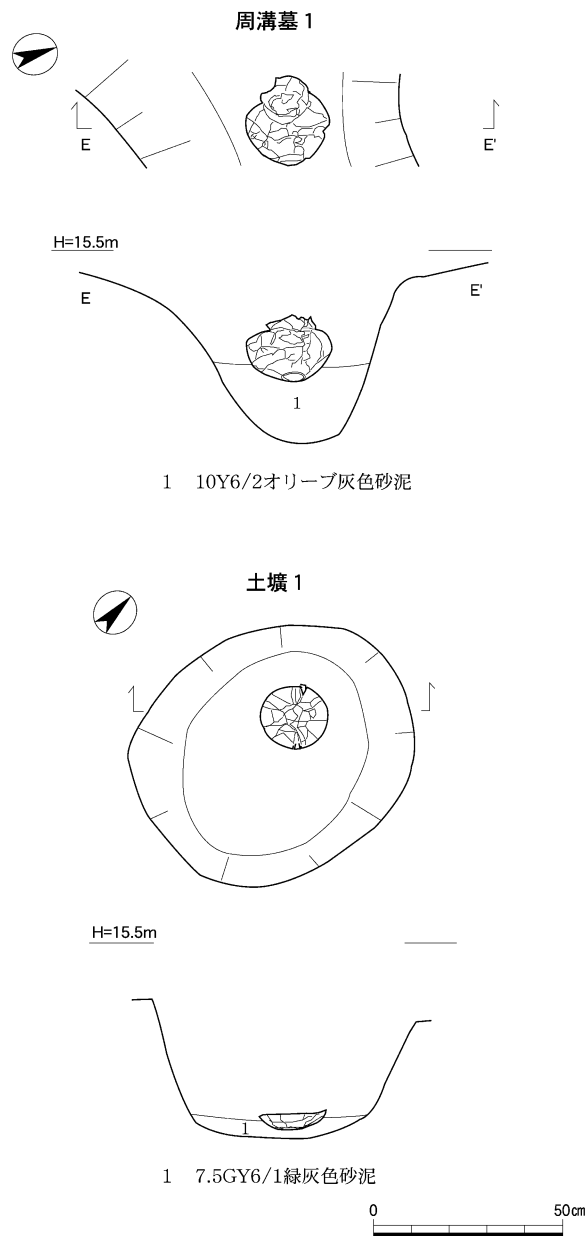


図 11 土器出土状況実測図（1：20）

0.5 mを測る。底部のやや北西寄りに完形の黒色土器碗が1点出土した。口縁部を上向きに据え置いた状態で検出しており、土壇内に意図的に埋納されたものとみられよう。

土壇2は平面形は南北0.5 m、東西0.4 mを測る楕円で、深さ0.6 mを測る。半完形の土師器皿が出土した。これも1点のみの出土で、埋納して埋め戻したものとみられよう。

溝は耕作に伴う畝溝で、奈良時代末から江戸時代の遺物が出土する。東西方向の溝がおおむね南北方向の溝を切っており、東西方向溝が新期とできよう。

建物は調査区南西隅で検出した。柱穴は径0.3 mの円形で、深さは0.4 mを測る。4基が検出されており、南北柱間が約2 m、東西柱間が約3 mを測る。柱穴内から瓦器碗の小破片が出土している。一間四方の建物で、極めて小規模であることから、農作業用の小屋とみることができるとみられよう。

表 1 遺構概要表

時代	遺構	備考
弥生時代	方形周溝墓	
平安時代	土壇	
室町時代以降	建物・溝	

3. 遺物

(1) 遺物の概要

弥生時代の土器は壺、甕、鉢がある。主として方形周溝墓1の溝内から出土したもので、畝溝に混入して出土したものも少量ながらある。平安時代の遺物は土師器皿、須恵器杯・鉢、黒色土器椀、緑釉陶器椀、灰釉陶器椀、白磁椀・皿がある。土師器皿は土壙2から出土し、黒色土器椀は土壙1から出土したもので、いずれも土壙内から1点のみが出土しており、埋納されたものとみられる。その他は畝溝に混入して出土した。室町時代の遺物は土師器皿、瓦器椀・鍋・釜、陶器鉢がある。建物の柱穴内、畝溝などから出土した。

(2) 出土遺物

1～9は弥生土器で、方形周溝墓1の周溝から出土した。1が南面周溝の西寄り、2～4が中央部で、5～7が東側で出土し、8が西面周溝の南寄り、9が北寄りからの出土である。

1は壺で、口径13.4cm、器高19.5cm、底部径3.6cmを測る。外面底部が窪み、小さな擬高台状を為し、体部は球形に近いが最大径がやや上位にある。内傾しつつ立ち上がる肩部は、頸部で屈曲して斜め上方に伸び、口縁部は大きく外反して広がり、端部を丸く収める。体部下半に認め

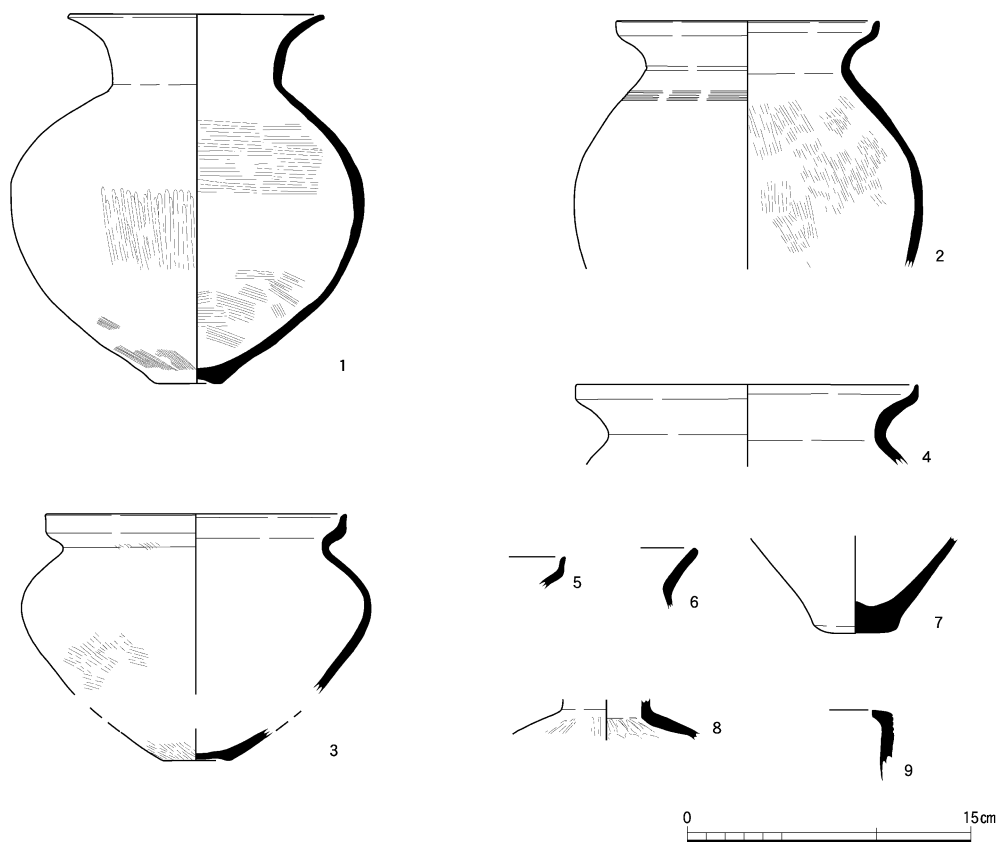


図12 出土土器実測図1 (1:4)

られる接合部の剥離面は、疑似的な口縁を呈している。体部外面下部をハケメ、中央部をミガク。体部内面下部を横方向の短いハケメ、上部に横方向のハケメを施す。外面の色調は灰白色、胎土は長石を混入し、焼成は良好である。

2は甕で、底部を欠く。口径 13.8 cm、器高 13.0 cm以上を測る。体部は内湾しつつ立ち上がり、肩部から頸部は如意形に外反する。口縁部は斜め上方に曲げられ受口を造り、端部は丸く収める。肩部外面に横方向の櫛描直線文を描き、体部内面体部上半に縦方向のハケメを施す。外面色調は灰白色を呈し、焼成は良好である。

3は甕で、口径 15.8 cm、復元器高 13.0 cmを測る。擬高台状に底部外面が窪む。体部は内湾気味に斜め上方に伸び、肩部は内傾して如意形の頸部に繋がり、口縁部は上方に曲げられて受口を呈し、端部は丸く収める。体部外面下半にハケメ、頸部にハケメ痕跡が残る。胎土に長石、石英、黒色粒を含む。焼成は良好であるが、器面の磨滅が激しい。

4は甕で、肩部以下を欠く。口径 18.0 cm。頸部は如意形に外反し、口縁部は上方に曲げられて受口を呈する。端部は丸く収める。外面色調はにぶい橙色、長石、石英、黒色粒含む。

5は口縁部のみの小破片で、口径・器高は不明。斜め上方に伸びた口縁部は上方に摘み上げられ受口を造る。端部は外反気味に丸く収める。

6は甕の口縁部のみが遺存した。口径・器高は不明である。頸部から口縁部が斜め上方に直線的に伸び、端部を丸く収める。外面色調は灰白色、胎土に長石、石英、黒色粒子を含む。

7は甕の底部が遺存したもので、底部径 4.4 cmを測る。分厚い底部は平坦で、斜め上方に体部が立ち上がる。外面色調は黒色で、内面は灰色を呈する。胎土に長石、石英、チャートを含む。焼成は良好である。

8は壺で、口縁部と体部を欠き、肩部と頸部下端が遺存する。肩部は内傾して伸び、直線的に上方に伸びる頸部と繋がる。頸部径は 4.5 cmを測る。肩部外面にミガキ、内面に絞り痕がみられる。

9は鉢の口縁部が遺存したもので、口径・器高は不明である。口縁部は直線的に立ち上がり、端部は内面に肥厚して上部に面を造る。外面に 4 条の櫛描直線文を横方向に描く。胎土は石英、長石、チャートを含む。

10は土師器皿で、口径 19.9 cm、器高 2.7 cmを測る。底部は平坦で、体部は内湾気味に緩く立ち上がり、そのまま口縁部に至る。端部は丸く収め、口縁部内面に沈線を持つ。外面は口縁端部まで丁寧にケズリを施す。外面色調はにぶい橙色で、胎土に長石、石英、金雲母を含む。

11は黒色土器椀で、口径 14.9 cm、器高 5.4 cmを測る。底部には断面半円形の高台を貼り付け、体部は内湾気味に斜め上方に立ち上がり、口縁部をわずかに外反させて、端部は丸く収める。口縁部内面に沈線を巡らす。内外面にミガキを施し、内面底部に暗文を描く。内外面の色調は黒色で、Aタイプに属したものである。

12は須恵器杯で、口縁部のみが遺存する。器高・口径は不明である。体部から口縁部は直線的に斜め上方に伸び、端部は窄まり気味に丸く収まる。色調は灰白色で焼成は良好である。

13は須恵器鉢で、底部のみが遺存した。底径は 9.8 cmを測る。糸切りによる底部は平坦で、外

反気味の体部は斜め上方に伸びる。
色調は灰色を呈する。

14 は緑釉陶器椀で、底部のみが遺存した。平坦な底部は糸切りによるもので、断面長方形の高台を貼り付け、内面に灰オリーブ色の釉を掛ける。

15 は白磁椀で、体部上半と口縁部が遺存する。口径・器高は不明である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は緩く外反して端部は丸く収める。灰白色の釉を掛ける。

16 は白磁椀で、口縁部のみが遺存した。斜め上方に立ち上がった口縁部外面に玉縁が付く。内外に灰白色の釉が掛かる。

17 は白磁椀で、口縁部のみが遺存する。斜め上方に伸びた口縁部は端部を丸く収める。器壁は薄く、器形も小振りである。灰白色の釉が掛かる。

18 は須恵質陶器鉢で、口縁部のみが遺存した。口縁部は玉縁状に外面に肥厚して、端部を上方に摘み上げ丸く収める。色調は灰色を呈する。

19 は須恵質陶器鉢で、体部上端と口縁部が遺存する。体部は肥厚気味に斜め上方に伸び、口縁部は外方に肥厚して玉縁状を呈する。端部は上方に軽く摘み上げ丸く収める。色調は灰色で、焼成は良好である。

20 は瓦器鍋で、口縁部のみが遺存した。口径は 24.5 cm を測る。上方に伸びた体部に内湾した口縁部が取り付け、端部は肥厚して斜め上方で面を為す。端部内側が窪み、蓋受けになる。

21 は陶器鉢で、体部上端と口縁部が遺存した。内湾気味に伸びた体部に、やや内湾した短い口縁部を取り付ける。端部内側が蓋受けとなる。

22 は瓦器羽釜の羽部分のみが遺存したもので、口径・器高は不明である。外面色調は灰色で、内面は灰白色を呈する。

23 は土師器皿で、小破片のために器高・口径は計測できない。体部は外反気味に斜め外方に伸び、口縁部はわずかに肥厚し、端部を上方に摘み上げて丸く収める。

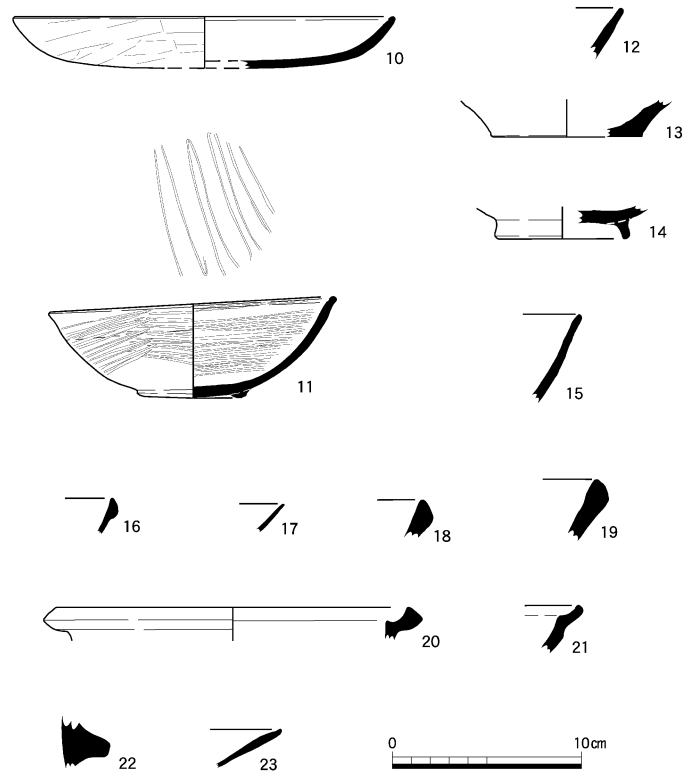


図 13 出土土器実測図 2 (1 : 4)

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代後期	弥生土器		弥生土器 9点		
平安時代	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、白磁		土師器 1点、須恵器 2点、黒色土器 1点、緑釉陶器 1点、白磁 3点		
室町時代	土師器、須恵質陶器、瓦器、陶器		土師器 1点、須恵質陶器 2点、瓦器 2点、陶器 1点		
合計		8箱	23点(1箱)	1箱	6箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より2箱多くなっている。

表3 掲載土器一覧表

番号	器種	器形	口径(cm)	器高(cm)	焼成	胎土	色調(外面)	調整	遺構	備考
1	弥生土器	壺	13.4	19.5	良	粗	灰白2.5Y8/2	ミガキ・ハケ・ナデ	周溝墓1	
2	弥生土器	甕	13.8	13.0	良	やや粗	灰白2.5Y8/2	ハケ・ナデ	周溝墓1	
3	弥生土器	甕	15.8	9.5	良	やや粗	灰白2.5Y7/1	ハケ・ナデ	周溝墓1	
4	弥生土器	甕	18.0	4.5以上	良	粗	にぶい橙7.5YR7/4	ナデ	周溝墓1	
5	弥生土器	甕	不明	1.8以上	良	やや粗	にぶい黄橙10YR7/3	ナデ	周溝墓1	
6	弥生土器	甕	不明	3.3以上	良	やや粗	灰白10YR8/2	ナデ	周溝墓1	
7	弥生土器	甕	底径4.4	4.1以上	良	やや粗	にぶい黄橙10YR7/4	ナデ	周溝墓1	黒斑
8	弥生土器	壺	頸部4.8	2.1以上	良	密	灰白10YR8/1	ミガキ・ハケ・ナデ	周溝墓1	
9	弥生土器	鉢	不明	3.7以上	良	やや粗	にぶい赤褐5YR5/4	ナデ	周溝墓1	櫛描き直線文
10	土師器	皿	19.9	2.7	良	密	にぶい橙7.5YR6/4	ケズリ・ナデ	土壌2	
11	黒色土器	椀	14.9	5.0	良	やや粗	黒N2/0	ナデ・ミガキ	土壌1	暗文
12	須恵器	杯	不明	2.8以上	やや軟	密	灰白5Y8/1	回転ナデ	機械掘り	
13	須恵器	鉢	底径9.8	2以上	良	やや粗	灰N6/0	回転ナデ	機械掘り	糸切り
14	緑釉陶器	椀	底径6.7	1.7以上	良	密	釉灰オリーブ7.5Y6/2	回転ナデ	検出中	糸切り
15	白磁	椀	不明	4.7以上	良	密	釉灰白N8/0	回転ナデ	溝27	
16	白磁	椀	不明	1.9以上	良	密	釉灰白5Y7/2	回転ナデ	溝21	
17	白磁	椀	不明	1.5以上	良	密	灰白N8/0	回転ナデ	溝25	
18	須恵質陶器	鉢	不明	2.0以上	良	密	灰N6/0	回転ナデ	機械掘り	
19	須恵質陶器	鉢	不明	3.2以上	良	密	灰N6/0	回転ナデ	機械掘り	
20	瓦器	鍋	24.5	1.8以上	軟	密	灰白5Y8/2	ナデ	検出中	
21	陶器	鉢	不明	2.6以上	良	密	釉浅黄2.5Y7/4		機械掘り	
22	瓦器	羽釜	不明	不明	軟	密	灰5Y5/1		機械掘り	
23	土師器	皿	不明	2.0以上	良	密	灰白7.5YR8/1		溝30	

4. ま と め

検出された方形周溝墓1は、特徴として、墳丘土や墓壙は後世の削平を受けて遺存しないものの深さ0.5mに及ぶ周溝が確認されたこと、周溝の南西部に土器が集中して出土したことを挙げることができる。周溝の断面形は逆台形を呈しており、造墓当初に何らかの護岸施設が設置されていた可能性がある。周溝の南西部にみられる浅い部分は、周溝墓内への通路に供した可能性があること、溝が半ば埋没した時期から溝内への土器の供献がみられ、西側周溝南半と南側周溝西半に集中していることなどが観察できた。また、調査地内でも複数の周溝墓を確認したこと、周辺工事中の掘削断面の巡検でも、さらに複数の周溝墓とみられる溝を現認しており、方形周溝墓がこの一帯に群として展開しているものとみてとれる。

平安時代の土器埋納遺構は、耕作に関わる地鎮、収穫を祈念した祭祀用の土壙とみられる。この他にも土器などの遺物が出土しない土壙が数例あり、祭祀土壙の可能性はある。

東西方向や南北方向の溝群は、平安時代から室町時代、江戸時代に至る耕作に関わる畝溝で、畑作主体の耕作痕跡とみてとれる。

出土した遺物に関しては、方形周溝墓の周溝内から出土した土器の内、1～4が供献された位置を大きく移動していないものと捉えている。5～9はそれぞれ単独ないしは複数の破片で出土した。報告時点での、畿内地域における土器編年観に従えば、1～4の土器に関しては弥生時代後期、畿内第V様式の中段階に収まるものといえよう。しかし、9の鉢に関しては、やや古い時期をあてる必要があり、中期、IV様式に遡りうるものである。調査地と周辺に展開する周溝墓群の存続した時期幅が一考できる遺物といえる。

調査地から出土した遺物には、弥生時代以外では、奈良時代末、平安時代、室町時代、江戸時代のものがある。特に、平安時代前期には既に祭祀遺構がみられることから、平安時代の早い時期から本格的な耕作地としての開発が押し進められたものと言えよう。

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	なかくぜいせき・おおやぶいせき							
書名	中久世遺跡・大藪遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2006-19							
編著者名	平田 泰							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2007年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかくぜいせき 中久世遺跡	きょうとしみなみく 京都市南区	26100	772	34度 57分 27秒	135度 43分 08秒	2006年11月 16日～2006 年12月8日	390m ²	宅地造成 工事
おおやぶいせき 大藪遺跡	くぜおおやぶちよう 久世大藪町 にばんちのさん 2番地3		773					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
中久世遺跡	集落跡	弥生時代後期	方形周溝墓	弥生土器				
大藪遺跡	集落跡	平安時代	土壙	土師器、須恵器、黒色土器、白磁				
		室町時代	建物、溝	須恵質陶器、陶器、瓦器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-19

中久世遺跡・大藪遺跡

発行日 2007年2月28日

編集
発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1

〒 602-8435 TEL 075-415-0521

<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地

〒 604-0093 TEL 075-256-0961